

# 倉俣史朗 年譜

## 倉俣史朗のデザイン

— 記憶のなかの小宇宙

2024年6月11日(火) – 8月18日(日)

京都国立近代美術館

主催：京都国立近代美術館、朝日新聞社

特別協力：クラマタデザイン事務所

協賛：竹中工務店

会場構成：西澤徹夫建築事務所

会場グラフィック：菊地敦己

会場施工：株式会社アートプラットフォーム

展示輸送：ヤマト運輸株式会社

KURAMATA

## 倉俣史朗 年譜

- 1934 (昭和9) 年 11月29日、父・倉俣吉治、母・清との間に、東京市の本郷 (現在の文京区本駒込) に生まれる。3人の兄と3人の姉がいる末っ子だった。生まれ育った理化学研究所の洋風建築は原風景となる。
- 1941 (昭和16) 年 7歳 東京市昭和国民学校に入学。この頃、大工の棟梁の仕事場を遊び場として通うなか、建築の「青写真」を見て、建築家に憧れるようになる。
- 1942 (昭和17) 年 8歳 誕生日に父親から子ども用の大工道具一式、兄からは三角定規とコンパスをプレゼントされる。
- 1943 (昭和18) 年 9歳 静岡県の愛鷹村 (現在の沼津市) の向坂家に縁故疎開で一人預けられる。
- 水洗便所は汲み取りへ、ロールペーパーは新聞紙へ、革靴は藁草履へ、激しい環境の変化も2カ月もしたころにはすっかり静岡言葉になり泥まみれで遊んだり野良仕事を手伝っていた。(「向坂家」、『未現像の風景』、1991年)
- 1945 (昭和20) 年 11歳 横浜市の鉄町に移り、鉄小学校に転校。母、姉2人、姪との5人で暮らす。東京の家、鉄町の家ともに空襲で罹災する。鉄町で敗戦を迎える。
- これで夜毎の空襲警報から解放されると思うとホッとした。今夜からゆっくり眠れることが単純になにより嬉しかった。(「敗戦」、『未現像の風景』、1991年)
- 1947 (昭和22) 年 13歳 鉄小学校を卒業し、新制中学に入るため家族と東京へ戻り、駒込林町 (現在の文京区千駄木) の借家に暮らす。文京区立第九中学校に入学。
- 1950 (昭和25) 年 16歳 東京都立工芸高等学校木材工芸課程に入学。野球部に所属する。
- 戦争時の記憶が残っているからだと思うけど、なんかきまりきった姿をさせられることにすごく反撥がある。高校時代はトックリのセーターで通して、学生服をきなかった。(長谷川堯、「ショーケースの悲哀—あるいは沈黙するクラマタの財産」、『商店建築』第18巻第6号、1973年6月)
- 1953 (昭和28) 年 19歳 東京都立工芸高等学校を卒業。東京写真短期大学 (現在の東京工芸大学) を受験するも入れず、浪人となる。翌年、帝国器材の設計部に、その約1年後には家具の商事会社に勤める。
- 1955 (昭和30) 年 21歳 前年に設立された桑沢デザイン研究所のリビングデザイン科に入学。教師として、デザイナーの渡辺力と剣持勇がいた。
- 授業の一環として小原会館で開催された第1回具体展を訪れ、強い衝撃を受ける。翌年の第2回展も観る。
- 1956 (昭和31) 年 22歳 桑沢デザイン研究所リビングデザイン科を卒業。イタリアの建築・デザイン雑誌『ドムス』に出会い衝撃を受け、この本が認めてくれるデザインをしようと思う。
- 1957 (昭和32) 年 23歳 東京の銀座4丁目の交差点の角地に株式会社三愛のビルが建設されることを知り、そのインテリアを手掛けたいと願い、三愛へ入社し宣伝課に配属される。
- 宣伝課にいと色々な仕事をします。グラフィック、ディスプレイ、タイポグラフィー、写真屋、売場の構成、宣伝術等々……八方美人ならぬ不美人になりがちです。しかし勉強にはなりました。(「新人登場 倉俣史朗」、『室内』第109号、1964年1月)
- 1963 (昭和38) 年 29歳 林昌二設計による三愛ドリームセンターが竣工。倉俣はインテリアを担当。後にインテリアの施工やアクリルの作品の制作を手掛ける株式会社イシマルを設立する石丸隆夫と出会う。
- 1964 (昭和39) 年 30歳 三愛を退社し松屋インテリアデザイン室嘱託となる。この頃、ガラスの仕事を請け負った株式会社三保谷硝子店三保谷友彦、木製の家具の製作を請け負った株式会社青島商店の青島賢治と出会う。

- 1965 (昭和40) 年 31歳 独立し、クラマタデザイン事務所を設立。所在地は港区芝西久保桜川町 (現在の港区虎ノ門1丁目)。
- 1967 (昭和42) 年 33歳 <引出しの家具>のシリーズを発表。デンマークのインテリア雑誌『モビリア』に掲載され、海外で初めての紹介となる。
- 高松次郎に「影」の壁画を依頼したクラブ「カッサドル」が開店。田中信太郎と出会い、生涯親交を結ぶ。クラマタデザイン事務所を港区赤坂に移転。
- 1968 (昭和43) 年 34歳 12月、『ドムス』第469号に、「ヴァン エドワーズ合同展」の会場写真と《プラスチックの家具 洋服ダンス》、《プラスチックのワゴン》の写真が掲載される。
- 1969 (昭和44) 年 35歳 年下のグラフィックデザイナーの青葉益輝、浅葉克己、長友啓典らを中心としたグループ「サイレンサー」に参加。総勢15名で、倉俣が参加した唯一のグループとなる。
- ファッション企業エドワーズの本社ビルディング (東京・南青山) を設計、初の建築設計の仕事となる。
- クラブ「ジャッド」や、エドワーズ本社ビルディングのショールーム によって、同時代のアメリカのミニマル・アートとの関連を論じられるようになる。
- むしろ、バウハウスのデザイン動きよりも、ダン・フラビン、ラリー・ベル、クリスト、ジャッド、というアートの方に興味が強くなっていったし、たぶん、田中信太郎や三木富雄なんかとつきあっていたのも影響しているかもしれません。(「interview 倉俣史朗」、『SD』第260号、1986年5月)
- イタリアへ行き、『ドムス』誌を訪れる。チェザーレ・カザッティとリサ・ポンティと会い、作品写真を何点か預ける。翌年、同誌第487号に《光の椅子》《光のテーブル》クラブ「ジャッド」が掲載。
- 1970 (昭和45) 年 36歳 日本万国博覧会において、山口勝弘がチーフプロデューサーを務める三井グループ館のインテリアデザインを担当。
- エドワーズの店舗「マーケットワン」のインテリアデザインを手掛ける。オープンの間際になって隣の店舗からの苦情により、FRPを使用したファサードが撤去される。
- ...ファサードが不明瞭なまま取りのぞかれ、その後施工業者から、夢の島で焼かれている話を聞かされ、黒煙を上げてもえている姿を思いたいへんショックを受け、最終処理までに対する思慮が稀薄だったのに自責の感が強い。(「原宿VOGUE」、『商店建築』第15巻第12号、1970年12月)
- 1971 (昭和46) 年 37歳 建築計画と店舗設計を担当した銀座カリオカビルが竣工。
- クラマタデザイン事務所を東京都港区六本木に移転する。
- 1972 (昭和47) 年 38歳 ギャラリー・フジエ (東京・渋谷) にて個展を開催。《ランプ (オバQ)》を発表。
- 第18回毎日産業デザイン賞を受賞。商店建築における一連の家具とディスプレイが評価された。
- 1973 (昭和48) 年 39歳 松屋デザインギャラリー (東京・銀座) にて「倉俣史朗の造形」展を開催。《引出しの家具》他を出品。
- 1974 (昭和49) 年 40歳 サイレンサーのメンバー 16名の『新婦人』での連載を収録した『サンドイッチサイレンサー』が王立出版社より刊行。
- 小説家の野坂昭如が第10回参議院選挙に無所属で出馬し、その選挙運動を黒田征太郎とともに手伝う。野坂とは知り合いではなかったが、著作を読み、共鳴していた。
- 1975 (昭和50) 年 41歳 多木浩二と対談をし、『キサデコールセミナーシリーズ1 多木浩二対談集・四人のデザイナーとの対話』(新建築社)として刊行される。
- あるものはアイロニーになって、あるものはパラドックス、あるいは意味性だったり、そういったいろんなカテゴリーが出てきて、その言葉の方に先につかまっちゃった。彼 [多木浩二] から逃れるというより、言語化された自分から逃れることに数年かかりました。(「interview 倉俣史朗」、『SD』第260号、1986年5月)

松屋デザインギャラリー（東京・銀座）にて、「倉俣史朗・思索への試作」展を開催する。《モンドリアン讃その1》、《椅子・その1》、《抽斗・その2》（市松の家具）他を出品。

1976（昭和51）年 42歳 画廊グリーン・コレクションズ（東京・南青山）で、《硝子の椅子》を発表する。

初の作品集となる『倉俣史朗の仕事』を鹿島出版会より刊行。1967年から1974年までの家具とインテリアデザインの代表作を収録。

フロムファースト（東京・南青山）のなかのイッセイ ミヤケの店舗デザインを行い、開店。このあとと亡くなるまで、国外を含めて各地のイッセイ ミヤケの店舗デザインを手掛ける。

1977（昭和52）年 43歳 美術評論家の東野芳明がキュレーションをした「Art Today '77 見えることの構造」展に4人の現代美術作家とともに参加（西武美術館、東京・池袋）。家具作品のほか、機能を持たない立体作品《記憶の手術台》を出品。

1978（昭和53）年 44歳 寿司店「梅の木」（東京・赤坂）の店舗デザインを行う。

1981（昭和56）年 47歳 東京の六本木に商業施設のアクシスビルが開業。倉俣はこのビル内の2店舗とともに、中庭の吹き抜けの階段をデザインする。

イタリアのデザイナーのエットレ・ソットサスからの誘いで、デザイン運動「メンフィス」に参加する。

メンフィス第1回展で《リッツ》、《インペリアル》を発表。

——メンフィスに参加して、ある意味ではデザインから解放されたことは、部分的にあると思います。他者に対してではなく、こんなことをしていいのだろうかというような自己制御といいますか、自己規制みたいなものが常にあるような気がします。それは教育のせいか、この国の持つ資質なのかわかりませんが、そこからもっと自由になりたいと思います。（「家具から始まったデザインへの旅」、『建築知識』第329号、1985年10月）

ロンドンのアラムデザインにて個展を開催。《引出しの家具》、《変型の家具 Side 1》、《ランプ（オバQ）》などを発表。メンフィスへの参加とともに、ヨーロッパでの知名度をあげるきっかけとなる。

1982（昭和57）年 50歳 エットレ・ソットサスが来日し、行動を共にする。

——ソットサスが日本に来た時、多分僕がストイックで観念的だからもっと気楽にやれという意味だと思っていますけど、貴方は禅坊主みたいだから物を落してパッと割れた瞬間の美しさみたいなものをやってみたらと言われたことがあります。（「interview 倉俣史朗」、『SD』第260号、1986年5月）

1983（昭和58）年 49歳 松屋（東京・銀座）1階のイッセイ ミヤケの店舗デザインで、色ガラスの破片を埋め込んだテラゾーを壁面、床、柱、テーブルの全面に使用。色ガラス入りのテラゾーは「スターピース」と名付けられ、倉俣のデザインを象徴する素材の一つとなる。

——友人たちはいろいろと感想を言ってくれます。…職人さんは「スターピース」と名付けてくれました。ぼくにとっては、すべて「記憶の破片」です。（「地獄と極楽」、『商店建築』第28巻第7号、1983年5月）

北イタリア、南仏、パリを旅行。ミラノ・サローネ期間中に開催されたメンフィス・ファニチャー・コレクションに参加し、《キョウト》、《ナラ》を発表。

1985（昭和60）年 51歳 アクシスビル（東京・六本木）のカッシーナジャパン・ショールームにて未発表の新作による「小展」を開催。《シング・シング・シング》などを発表。

「シング・シング・シング」はジャズの曲名で、これ以降作品名を即物的なものとはせず、しかし特定のイメージと結びつかないような言葉を選んで付けるようになる。

京都国立近代美術館「現代デザインの展望 ポストモダンの地平から」展に《キョウト》、《ガラス・テーブル》（トワイライトタイム）などを出品。東京国立近代美術館に巡回。

富山県立近代美術館(現・富山県美術館)において開催された「現代日本美術の展望—生活造形」展に《シング・シング・シング》、《椅子》(ココ)を出品。

1986(昭和61)年 52歳 ブリヂストン旧本社ビル(東京・京橋)1階ロビーの改装を担当する。デザインした家具を配置することに加え、田中信太郎の彫刻作品を設置。

イッセイ ミヤケの渋谷パルコパート1店のショーウィンドーにエキスパンドメタルのソファ《ハウ・ハイ・ザ・ムーン》を展示する。

パリでは初となる個展をギャラリー・イヴ・ガストゥにて開催。《ハウ・ハイ・ザ・ムーン》他を展示。

1988(昭和63)年 54歳 バー「コンプレ」(静岡・呉服町)を設計。同店は、現在もデザインを維持して営業を続けている。

『倉俣史朗・仕事集』の新装改訂版として『倉俣史朗 1967-1987』をPARCO出版局から刊行。1982年以降の代表作の作品写真や図面に加え、エトトレ・ソットサスが新規に寄稿。

「KAGU 東京デザイナーズウィーク'88」が開催され、アクシスギャラリー・アネックス1にて《ミス・ブランチ》を発表。

— どうして薔薇なのか自分でもよく分からない。...ただ、今言えることは、紅い薔薇でなくてはならず、生花でなく造花でなくてはならないということです。(「浮遊する紅い薔薇」、『ブルータス』第205号、1989年6月)

設計を行った寿司店「きよ友」(東京・新橋)が開店。

1989(昭和64)年 55歳 (平成元) パリのギャラリー・イヴ・ガストゥにて個展を開催。《ミス・ブランチ》他アクリルを使った家具を多数出品。国立高等装飾美術学校で講演を行う。この展覧会を機に、翌年フランス文化省芸術文化勲章を受章する。

イタリア人建築家のアルド・ロッシ設計のホテル「イル・パラッツォ」(福岡・博多の春吉)が開業。アートディレクションは内田繁で、倉俣は4つのバーの一つ「オブローモフ」のインテリアデザインを行う。

1990(平成2)年 56歳 アクシスビル(東京・六本木)の地下1階のデザイン・ショップ「スパイラル」の全面改装を手掛ける。《アクリルスツール(羽根入り)》と《アクリルスツール》を設置。

1991(平成3)年 イタリア、フィレンツェのストロツィ宮殿で、デザイナーのアンドレア・ブランジの企画「イル・ドルチェ・スティル・ノーヴォ・デラ・カーサ」にて4mの長さを持つベッド《ラピユタ》を発表。倉俣は展示を見ることはなかった。

2月1日、心筋炎による心不全のため東京都大田区の東邦大学大森病院にて死去。享年56。

生前より準備をし、執筆を進めていた随想集『未現像の風景』が住まいの図書館出版局より刊行される。

東京MIビル(東京・天王洲)の26階に、倉俣の急逝後、事務所員の五十嵐久枝によって施工が継続されたレストラン「ラピユタ」が完成する。

同ビル1階に、倉俣の生前に基本設計が完了し、模型も7割方完成していた割烹「たちばな」が、長男の倉俣一郎の協力によって完成する。

ギャラリー・間(東京・乃木坂)にて、倉俣を追悼する展覧会「夢の封印」が開催される。また、同ギャラリーの企画で、倉俣のスケッチをまとめた作品集『STAR PIECE 倉俣史朗のイメージスケッチ』がTOTO出版より刊行される。

1993(平成5)年 クラマタデザイン事務所が世田谷区桜に移転。

1996(平成8)年 東京の原美術館にて「倉俣史朗の世界」展が開催。展覧会はメキシコシティー、サンフランシスコ、ニューヨーク、モントリオール、パリ、ウィーンを巡回し、1999年に京都国立近代美術館で終了。

2011(平成23)年 東京の21\_21 DESIGN SIGHTにて三宅一生の企画による「倉俣史朗とエトトレ・ソットサス」展が開催。

- 2013 (平成25) 年 埼玉県立近代美術館にて「浮遊するデザイン——倉俣史朗とともに」が開催。倉俣史朗の作品と同時代の美術家やデザイナー、クラマタデザイン事務所から独立したデザイナーにも焦点をあてた。
- イギリスの出版社のファイドンより、世界で最初のモノグラフとなる『Shiro Kuramata』が刊行される。2冊組で1冊目は評伝、もう1冊はカタログレゾネとなっている。
- 2021 (令和3) 年 2004年に閉店していた新橋の寿司店「きよ友」を2014年に移設し、多数の倉俣作品を収蔵する香港の美術館M+がオープンする。
- 2022 (令和4) 年 事務所で保管していた作品に加え、インテリアや家具の図面、掲載雑誌の切り抜き、写真・映像資料が一括で石橋財団アーティゾン美術館に収蔵される。
- 2023 (令和5) 年 「倉俣史朗のデザイン——記憶のなかの小宇宙」展が世田谷美術館(11月18日—2024年1月28日)、富山県美術館(2024年2月17日—4月7日)、京都国立近代美術館(2024年6月11日—8月18日)で開催。